

雲上の池と針峰群

某年某月

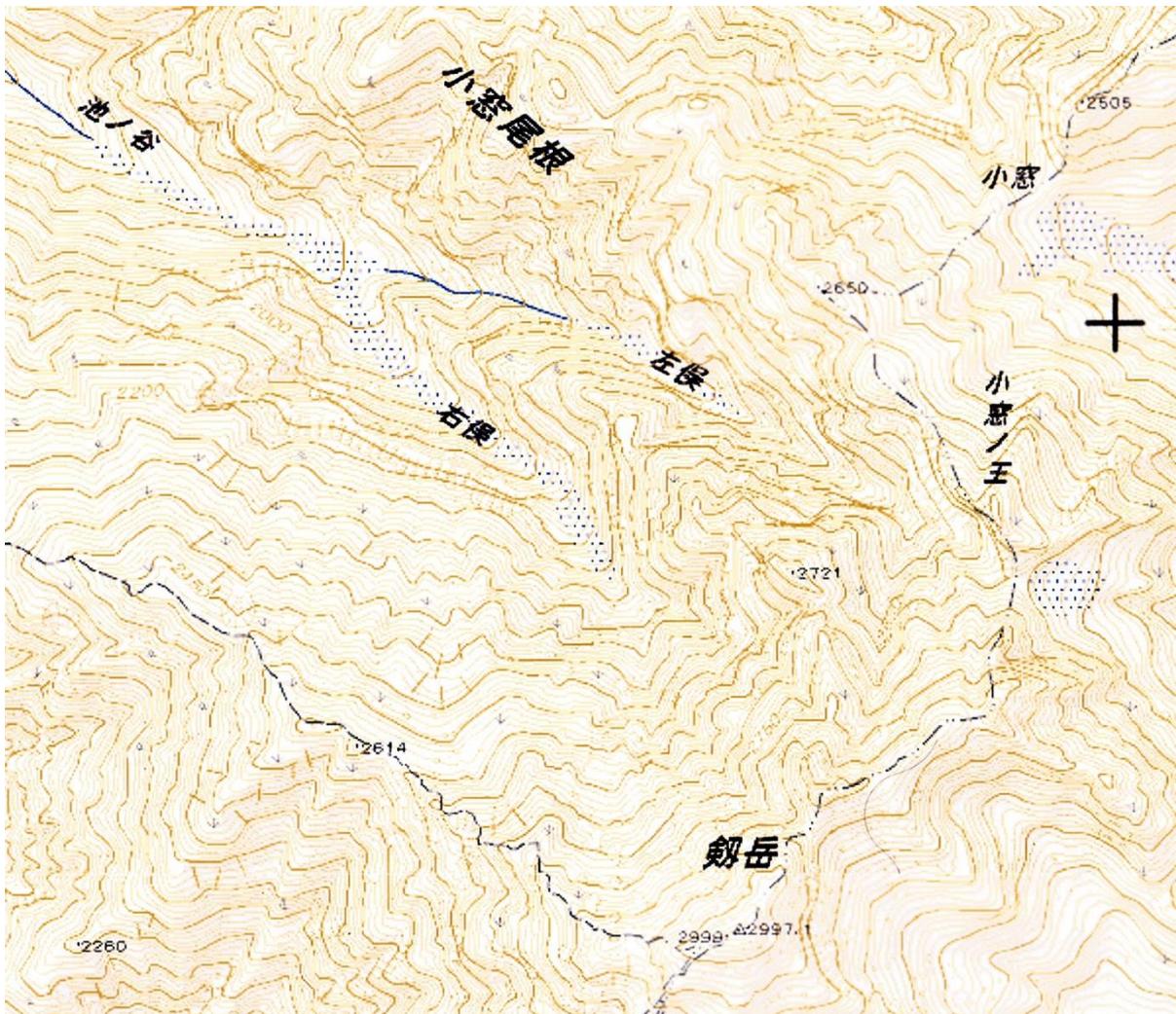
火山列島の上に位置する日本の山には火口湖は多いが、針峰は少ない。両方の景観が得られるのは越中の劔岳くらいなものであろうか。

さて。

某月某日、真夏のカンカン照りの中を、ウンウン唸りながら狭いルンゼを登って行った。ここはバリエーションルートにもなっていない凶悪な沢筋のドンヅマリの屹立した泥壁で、登山者はおろかケモノも滅多に通らない地獄境である。何やら五色の雲もたゆとうている様で、時折イワツバメの鋭い羽音が静寂を切り裂くだけである。何処やらから天上の舞楽も聞こえてきそうな気配は空耳であろうか。

ズルズルと滑る泥の壁をやっと乗り越えて稜線に飛び出した。足下には翠の水を満々と湛えた火口湖がさざ波を立て、その向こうには白い花崗岩の針峰群が真夏の夕陽を受けて黄金色に輝いているではないか。この日本離れした光景をどう表現したらいいか。パタゴニアかどこかの山の写真集にでも載っているような風景である。

嬉しくなって、早速裸になって池に飛び込んだ。何やら水中でウジャウジャと足に触るモノがあるが、魚でもいるのであろうか。このような山上の池に魚が棲息しているとも思えないが……。よく見ると湯気も昇っているようでもある。小1時間ばかり泳いでいる内に、すっかり良い気持ちになった。ふと気が付くと、辺りは何か異境のようで現世とも思われぬ雰囲気である。池畔に天幕を張り、缶ビールを呑みながら明日の針峰群の登攀に胸をときめかせつつ仮寝の夢を結んだ。



翌朝は、針峰群の天辺あたりに怪し気な雲が少し流れてはいるが、見事な青空。早速、装備を付けて登攀にかかる。今回は単独行であるから、確保してくれる相棒も居らず、『単独登攀システム』で自分を確保しつつ登らなければならないから、海外クライミング等の雑誌に載っているような華麗な芸当はできない。登っていく内に、ツルツルのスラブが現れて、ホールドが全く無くなった。最後にとったランニングビレーはかなり下の方になっているから、ここで落ちたら20mは墜落する。確保システムが効いて途中でうまく止まっても骨折は避けられそうにもない。内蔵破裂で即死か？ ハーケンが抜ければ一直線にあの世行きだ。ア～ア、御名御璽。岩肌を流れている霧も何やら来迎図に書いてあるお迎いの五色の雲のようだ。神様！ 仏様！ キリシトさま、オカアチャン、助けてくれ～。手と足の感覚がなくなってきたッ～。これはイケナイ！

ワチキはもう死ヌ！ 死ヌ！ と思ったところで目が覚めた。びっしょりと寝汗を掻いていた。ア～ア、夢だったのか。助かった。寝汗で気持ち悪い布団の中でゴソゴソやりながら、先程まで見ていた夢を反芻してみた。昨日登って来た異様なズルズルの泥壁は『賽の河原』だったようだ。翠の火口湖と思って泳いだ池は『血の池』だ。ウジャウジャと足にまとわり付いてきたモノは、無間地獄に苛まれている亡者であったか。昇る湯気は鬼が発する火炎であったか。さっき落ちそうになった針峰群は実は『針の山』であって、ここに3億年間程座らされていたような気がする。道理で足の感覚が麻痺していた訳だ。まさに立山曼陀羅地獄絵の世界。

2ヶ月程前、一木一草も無いアンデスの岩山を1ヶ月間ほど歩いて来たので、その残像がなせる業か。はたまた、このところ酒池に溺れっぱなしで、オカアチャンとパラサイトシングル娘から毎晩おコゴトでイビられていたから、その怨念と若干の反省がなせる業であろうか。女2:男1では勝ち目がないワイ。そういえば赤鬼や青鬼共の顔は、我がオカアチャンと娘に似ていたナア。南無阿弥陀仏。

(白山書房刊『山の本』第48号(2004年夏号)所載)

(2003年3月記)

[「夢幻の山旅 私の机上登山」目次へ戻る](#)